

# 19 世紀文化論ノート（下） —— 怪物が生れる時

大 貫 徹

以下の論文は『Litteratura 14 号』（1993 年，1 頁—23 頁）に掲載された拙論『19 世紀文化論ノート（上）——怪物が生れる時』に直接続くものである。ちなみに筆者の『19 世紀文化論ノート』全体の構成は以下の通りである。

0. はじめに
1. 誘惑の主題
2. 濃密な親和的空間
3. 親和的空間の裂け目
4. 近代都市特有の空間構造（以上、『Litteratura 14 号』掲載）
5. 二つの空間／二つの住居（以下，本号掲載）
6. 近代的都市空間と伝統的都市空間
7. おわりに

## 5. 二つの空間／二つの住居

かくて、ジーキルやアタスンなどがその中に住むきわめて濃密な親和的空間と、ハイド的存在に代表される、孤独な群集がうごめく大都会ロンドンの都市空間との間には大きな隔たりがあることになる。強いて言えば、前者が伝統的都市特有の前近代的な共同体空間。これに対して、後者は近代都市特有の脱中心的な巨大空間ということになろうか。言うならば、二

つのまったく異なる居住空間がこの物語には存在しているということになるであろう。正しくは、ジーキルやアタスンたちの前近代的共同体空間をすっぽり包み込むようにして近代的都市空間が存在していると言うべきであろうか。

もちろん、上の二つの生活空間が静態的な状態のまま永遠に包含的な関係にあるというわけではない。むしろ、二つの空間の間である種の力が互いにたえず働き合っているように思われる。そして、その力学的作用の結果、そこに、ある奇妙なゆがみが生じていると思われるのである。おそらく、『ジーキル博士とハイド氏』という物語の本質的な問題とは、ジーキルが善を象徴し、ハイドが悪を象徴するということではなく、ましてや、変身することで人間の心に潜む「二重人格」を取り扱っているというようなことでもない。この物語の真の問題とは、近代以前の共同体空間と近代そのものの巨大都市空間とが奇妙な具合に絡み合っている、まさにその地点でジーキルからハイドへの変身という事件が生じているということにあるのである。問題は二つの生活空間の力学上の交錯具合なのである。

このことをもっともよく象徴しているのが、ジーキル（＝ハイド）の住居の構造<sup>(1)</sup>である。そもそも、この家には二つの入り口があり、表通りに面している方がジーキルの住まいの入り口となり、裏通りの方がハイドの入り口となっている。ジーキルの住まいの方は、その玄関からして「いかにもゆったりと物持ちらしく、安楽に暮らしている様子」(p. 19)が伺えるもので、いったん、家の中に入ると、そこは「天井の低い、気持ちのよい広間」(p. 19)があり、「この広間は、友人である博士の、数寄をこらした自慢の部屋であ[り、] ロンドン随一の快適な部屋であ[った]。」(p. 20)一方、ハイドの方は、ジーキルとはまったく対照的に、「長い間、汚れ放題にほったらかしてあったとしか思えぬ」(p. 8)戸口しかなく、その「たった一つの戸口にも、ベルもノッカーも取り付けられてあるわけではなく、ペン

キが剥げて変色している」(p. 8)し、そこには「浮浪者どもは、入り口のへこんだ所へ入り込んで、戸の羽目板でマッチをする。[]」(中略)もう三十年も、誰ひとり中から出て来て、こんな勝手放題な侵入者たちを追ひ払ったり、彼らの荒らした跡を修繕したりすることなく過ぎた」(pp. 8-9)というのだから、その荒廃振りも凄まじいものである。このように対照的な二人の住居が「深い井戸底のようにになっている」(p. 47)裏庭を間に挟んでつながっているのである。

しかしながら、ジーキルのロンドン随一という立派な住まいのある一画も、よく見れば「今は、昔の由緒ある面影も大方荒れ果てて、一階々々、部屋々々に区切って、種種雑多な連中、つまり、地図の版下師、建築師、三百代言、不明朗企業の代理人などという手合に貸している。しかし角から二軒目の家だけは、今なお、一個人の屋敷になっていた」(p. 19)というのだから、ジーキルの住居は、実際には、ハイド的な正体不明の都市下層階級の人々に取り囲まれた中に、一軒だけ、あたかも孤立しているかのように建っているに過ぎないのである。先に述べた「ジーキルやアタスンたちの前近代的共同体空間をすっぱり包み込むようにして近代的都市空間が存在している」ということが、まさに、ジーキルの住まいそのものにまで当て嵌まっているのである。しかも「今は、昔の由緒ある面影も大方荒れ果てて」というのだから、ジーキルの立派な屋敷も、近いうちにハイドのそれと同じほど荒廃してしまう恐れだってまったくないというわけではないだろう。まさに、前近代特有の親密な共同体の空間が、近代都市の巨大な均質空間に取り囲まれ、やがて次第にそれに飲み込まれてしまうことを充分に予感させる状況が描かれているように思われる。

## 6. 近代的都市空間と伝統的都市空間

となると、ここで参照したいのはメアリー・ウルストンクラフト・シェリーの『フランケンシュタイン』である。すでに、「誘惑の主題」という章

で、この作品については触れている<sup>(2)</sup>のであるが、ここでは、近代的都市空間と前近代的共同体空間との力学上の対立的交錯という点に関して再び言及したいと思う。先に『フランケンシュタイン』から引用した主人公ヴィクトールの言葉をここでもう一度引用しよう。それは以下のような言葉である。

知識を得るのがいかに危険なことか、生まれた町こそ全世界だと信じこんでいる男の方が、おのれの本性が許す以上のものになろうと憧れる男よりどんなに幸せか。(p. 53)

『フランケンシュタイン』という物語の中心テーマのひとつに、非日常的な真理の探究と平凡な日常的幸福という対立がある。これは、言い換えれば、何か壮大なこと、革命的なことを成し遂げようとするロマン派的衝動と、そうしたものを否定して普通の日常生活の幸せこそを大切とする現実主義的な考えとの対立である。実際、『フランケンシュタイン』には、ジュネーヴ近郊に住みそこでの日々の生活に満足しているフランケンシュタイン一家と、そこを離れては野心に駆られて「怪物」を創造し、その結果、世界各地を彷徨することになってしまった息子ヴィクトールという地理空間的な二極構図がある。しかも、この息子のもとに、故郷にいる父親や友人、恋人たちは早く故郷に戻ってきて平凡ながらも幸せな生活を送って欲しいという内容の手紙をたえず送り続けるのであるから、この物語は、生き方の面でも地理空間的な面でも明確な二極対立構造となっていることは間違いない。こうした二極構造の中で、引用した一節である「生まれた町こそ全世界だと信じこんでいる男の方が（中略）どんなに幸せか」ということが口にされるのである。

「生まれた町こそ全世界だと信じこんでいる」とは、まさに、近代以前、まだ地域的共同体の中で人々が自給自足的に生活していた時代の生活信条

そのものであろう。そこではすべての人々が古くからの友人、知人であり、至るところに姻戚関係が結ばれていて、いわゆる血縁、地縁で結ばれた濃密な社会を形成している。これは、『ジーキル博士とハイド氏』におけるジーキルやアタスンたちの世界にも似た、親和的な共同体空間で、まさにテンニースが言うところのゲマインシャフトそのものである。<sup>(3)</sup> この作品では、フランケンシュタイン一家が住むジュネーヴ近郊がそうした親和的共同体空間としてきわめて理想的に描かれている。

こうした親和的な空間の中に突然現れたのが、ヴィクトールの創造した「怪物」である。あたかも、故郷を離れて「おのれの本性が許す以上のものになろうと憧れ」たことがいかに危険なことであるかを象徴するかのごとく、「怪物」はフランケンシュタイン一家を次々に破滅させてゆく。まず、ヴィクトールの幼い弟を、次に彼の親友を、さらには愛する花嫁を、父親をその手にかけてゆく。そして最後には、ヴィクトール自身もいわば間接的に殺されてしまう。

もちろん、物語では、「怪物」がハイドのように近代的都市空間そのものに属している存在<sup>(4)</sup>というように描かれているわけではない。「怪物」はあくまでもいろいろな材料から組み立てられた人造物に過ぎない。問題は、むしろ、その創造者であるヴィクトールの方である。彼は、「生まれた町こそ全世界だと信じこんでいる男」ではなく、たえず、その町から脱出しようとしている男であり、その町に戻るのを——帰りをひたすら待ち焦がれている美しい婚約者がそこにいるにも拘わらず——一瞬でも遅らせようとしている男なのである。いわゆる近代社会特有の故郷喪失者の典型である。<sup>(5)</sup>

実際、彼は故郷を離れる際、「優しい仲間にくまれて、いつも互いに喜びを与え合うことに精を出してきた私。その私が今はひとりぼっち。これから行く大学では自分で友人を作り、自分で自分を守らなくてはならない。これまで世間を離れ、きわめて家庭的な人生を送ってきたせいで、新しい

顔にはどうにもならぬ嫌悪を覚えてしまう。弟たちや、エリザベス「彼の恋人」や、クラーヴェル「彼の親友」のことは愛しています。彼らは古い馴染みの顔だから」(傍点引用者)(p. 45)と、その親和的空間からの離脱を寂しがるが、それもつかの間、旅が進むに連れて元氣と希望が湧いてきて次のように言う。

知識の習得は自分が熱望していることではないか。家に居るときはよく、ひとところに閉じ込められっぱなしの人生なんて耐えられないと思い、世の中に出て他人の間に地位を得たいと憧れたもの。今、願いが適えられたのだから、これを悔やむなんて愚かというものだぞ。  
(p. 45)

かくて、彼はインゴルシュタットの大学に入り、やがてそこで「怪物」を創造することになる。古い馴染みの顔に囲まれた家庭的な雰囲気の世界から、新しい見慣れぬ顔しかない、まさに他人ばかりの近代都市的世界へと脱出した瞬間に、「怪物」を創造することになるわけである。言い換えれば、「怪物」とはヴィクトールが共同体空間としての故郷を離脱した瞬間に誕生したことになる。もちろん、息子ヴィクトールがこうした家庭的な世界を離脱した瞬間、それまでとは異なる存在へと変貌するかもしれないという恐れはその父親になかったわけではない。父親は別れに際して、息子に、「お前自身が自分に満足している限りは、私たちのことも愛情を持って思い出してくれるだろうし、きちんきちんと手紙もよこすだろうということだ。お前の便りが途切れたその時は、すまないが、お前がほかの義務もやはりおろそかにしている証拠だと思わせてもらうことにするよ」(p. 55)と警告を与えているにも拘わらず、息子ヴィクトールは故郷の世界の力学圏の向こうに離脱してしまうのである。この時、『フランケンシュタイン』という物語は、『ジークル博士とハイド氏』の場合と同様、近代社会と

前近代社会とが、言い換えれば、近代都市空間と共同体空間とが微妙に交錯するのである。つまり、共同体空間に止めておこうとする力とそれに激しく反発しようとする力とが交錯し、互いの引力を及ぼし合うのである。しかし、ヴィクトールは、共同体空間の引力を振り切って、いわば反・共同体空間とでも言うべき「他人ばかり」の近代都市空間へと飛び出してしまったのである。

しかも、ヴィクトールは共同体空間を離脱してしまうだけではない。彼は自分の生まれ育った世界をあたかも破壊するかのように、逆に、「怪物」を一種の破壊者としてそこに送り込むのである。言い換えれば、前近代的な共同体空間の破壊者として「怪物」をそこに送り込んだということになる。

これと同じことが『ジーキル博士とハイド氏』においても言えるのではないだろうか。時は、19世紀後半、場所は当時の世界的大都会であるロンドン。まさに近代都市そのもののロンドンにおいて、いかにも反時代的な濃密な共同体空間の中に住んでいたアタスン、ジーキルそしてラニョン。ジーキルは自分がハイドに変身することでその息苦しいほど親和的な世界からの脱出を——無意識にも——図った。ヴィクトールと同様、前近代的な親密的共同体空間からひたすら脱出するために。しかし、ハイドに変身した瞬間、ジーキル＝ハイドは、まったく思いも寄らぬことに、近代的都市空間に属する存在として、逆に、共同体空間にとってはまさに怪物的存在として、『フランケンシュタイン』の「怪物」と同じく、伝統的な共同体空間の破壊者のごとく振る舞うことになってしまった。実際、ジーキル博士は（ハイドと共に）死に、ラニョン博士もジーキルが変身する瞬間を目にしてショックの余り死んでしまう。この物語ではアタスンだけが死んでいないのだが、それは彼だけが事件の真相を認知していないためであり、物語の後半の多くを占めるラニョン博士の手記とジーキル博士の陳述書を読んだ後で果して生きてゆけるであろうか。

いずれにせよ、ハイドという怪物的存在は、こうした観点から見るならば、近代的都市空間がジーキルやアタスンたちの前近代的伝統空間の中に強引に侵入し、そのあげくその親和的共同体空間を完全に崩壊せしめたという、近代ヨーロッパの歴史的な流れを見事に象徴する存在と言えるのではなからうか。まさに、オスマン男爵によるパリの大改造が、中世以来の古いパリ——しかしながらそれは「快い温かさ」をもった親和的な空間としてのパリ<sup>(6)</sup>である——を暴力的に解体するものであったように。逆に言えば、親和的な共同体空間が近代都市特有の巨大な均質空間によって徹底的に崩壊させられた時、それが怪物として文学的に形象化されたということになるのではないだろうか。

そういう意味では、以下に引用する擬似殺害場面はきわめて象徴的である。これは先に引用した<sup>(7)</sup>、アタスンが眠れぬまま、まだ見ぬハイドの姿を想像している場面の中で略した部分である。

裕福な邸宅の一間、彼の友人が眠っている。夢見ながら、ほほ笑んでいる。部屋の扉が開く。寝台のカーテンが、さっと引き開けられ、眠っていたものが、呼び起こされる。と、見よ、枕もとにひとりの男が立っている。その男には威力が与えられている。友人はこんな真夜中でも起き出で、その男の命令に従わなければならない。(p. 16)

枕もとに立っているのが強引な侵入者ハイドであり、そこに横たわっているのが何も知らずに夢見ているジーキルである。心地よい親密空間に包まれて「ほほ笑んでいる」ジーキル。そんなジーキルを上から強圧的に覗き込む冷酷な《alien》的存在のハイド。この垂直構図こそ、ここでの力関係を如実に示しているものであろう。明らかに権力的な構図である。だからこそ「その男には威力が与えられている。友人はこんな真夜中でも起き出で、その男の命令に従わなければならない」ということになるのであ



る。この垂直構図こそ、オスマン男爵による古いパリの暴力的解体の構図そのものではないだろうか。中世以来の古い温かいパリは「こんな真夜中でも起き出で、その男の『暴力的な解体』命令に従わなければならない」のだから。

シャルル・ボードレールは歌った。

古いパリはもう無くなった（都市の形態の  
すみやかに変わることは、ああ！ 人の心も及ばぬほど）。

（中略）

パリは変わる！ だが私の愁いの中では、何もかも  
動きはしなかった！ 新しい宮殿、組まれた足場、石材、  
古い場末の町々、すべてが私には寓意となり、  
物のなつかしい思い出の数々は、岩よりも重い。<sup>(8)</sup>

## 7. おわりに

すでに触れたように、19世紀も半ば過ぎ、セーヌ県知事オスマン男爵によるパリ大改造が行われ、そのため、ボードレールをはじめ多くの人々が「古いパリと新しいパリ」という対比的な形で、この都市の移り変わりを文字にしていることは、ヴァルター・ベンヤミンのみならず多くの論者が述べる通りである。<sup>(9)</sup> またそれから少し後には、今日ではフローベールの友人としてのみ知られるマクシム・デュ・カンが、パリという都市の変容に着目し、19世紀後半のパリの姿を『パリ、19世紀後半におけるその組織、機能、生活』（1869年—1875年）と題する膨大な都市論の中で詳述していることも、蓮実重彦の浩瀚な著作（『凡庸な芸術家の肖像』）のおかげで誰もが承知していることである。<sup>(10)</sup> 明らかに、この頃、大掛かりな都市改造が行われることによって、自分の住む都市空間に対して、何か親密なもの、何か貴重なものを永久に失ってしまったのだという喪失感<sup>(11)</sup>を多くの

人々が広く共有する事態が生じたのである。<sup>12)</sup>

われわれも、ベンヤミンという先駆的な例に倣って、都市空間に対するそうした変化にまず着目したのであるが、ただ、この論文では、中心主題をスティーヴンソンの『ジークル博士とハイド氏』、ことにその（影の）主人公であるエドワード・ハイドというこの上なく不可解な存在を文化史的な文脈において解明することに限定した。その結果、ハイドという怪物的な存在は、19世紀後半の近代社会における都市空間の劇的な変容そのものから、いわば直接生み出されたものではないかと考え、それゆえ、『ジークル博士とハイド氏』という物語は、普通考えられているような、「善と悪との二重人格」を見事に描いたことにその本質があるのではなく、19世紀の後半に生じた都市空間の歴史的変容をハイドという奇妙な人物像を通して象徴的に描いて見せたことにその真の意味があると考えたのである。

## 註

- (1) ジークル（＝ハイド）の住居の二重性については、ウラジミール・ナボコフ『ヨーロッパ文学講義』（野島秀勝訳）（TBS ブリタニカ、1982年、240頁－244頁）に詳しい記述がある。この記述に大いに示唆された。

テキストとして以下のものを使用した。

Robert Louis Stevenson : *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde and Weir of Hermiston*, edited with an Introduction by Emma Letley, Oxford University Press, 1987, <<The World's Classics>>.

引用は、引用箇所の最後にその頁数のみ記すこととする。

- (2) 大貫徹『19世紀文化論ノート（上）——怪物が生れる時』（『Litteratura 14号』, 1993年、3頁）

テキストとして以下のものを使用した。

Mary Wollstonecraft Shelley : *Frankenstein or The Modern Prometheus*, edited with an Introduction by M. K. Joseph, Oxford University Press, 1980,

《The World's Classics》.

引用は、引用箇所最後にその頁数のみ記すこととする。

- (3) 大貫前掲論文, 13 頁。
- (4) 大貫前掲論文, 16 頁。
- (5) もちろん、故郷から離れたまま、そこに帰らないことがただちに近代社会に特有なものとは言えない。しかし、このヴィクトールの姿に、19 世紀小説を代表する主人公、すなわち『ゴリオ爺さん』（バルザック）のウージェーヌ・ド・ラスチニャックや『感情教育』（フローベール）のフレデリック・モローに典型的に表れている、近代ブルジョワ社会に特有な野心的地方青年の姿そのものを見ることは十分可能であると思う。それゆえ、彼を「近代社会特有の故郷喪失者の典型」としたのである。
- (6) 富永茂樹『都市空間のための見取図 ——都市と集団とにおける構想力について——』（『展望』, 1976 年 8 月号, 52 頁）
- (7) 大貫前掲論文, 10 頁。
- (8) Charles Baudelaire: *OEuvres complètes* t. 1, Gallimard, 1975, 《Bibliothèque de la Pléiade》, PP. 85—86.  
但し、日本語にするにあたって、阿部良雄訳を使用した。『世界文学全集 55』（講談社, 1981 年, 107 頁—108 頁）
- (9) ヴァルター・ベンヤミンは、その論文『パリ——19 世紀の首都』（1935 年執筆）において、次のように述べている。

パリの人口は、オスマンの企画によっていよいよ膨張し、家賃は高騰し、無産階級は郊外へ移転せざるを得ない。パリの市区（カルチェ）はこのことによって固有の相貌を失い、赤い囲壁が成立する。オスマンは自ら〈芸術的破壊者〉と称した。（中略）彼は、パリの市民からこの都市を疎外したのだ。市民たちはもはやパリを故郷と感ずることができない。大都市の非人間的な性格を、彼らは否応なしに思い知らされはじめる。（『パリ——19 世紀の首都』[川村

二郎訳) [『ヴァルター・ベンヤミン著作集6・ボードレール』所収論文] [晶文社, 1975年, 28頁])

- (10) 蓮実重彦『凡庸な芸術家の肖像 ——マクシム・デュ・カン論』(青土社, 1988年)

- (11) もちろん, 喪失感ばかりではない。むしろ, 古いパリが取り壊されることによって, パリの都市空間は再生したのだとする積極的な見方もある。(富永茂樹『オスマンとパリ改造事業』(京都大学人文科学研究所報告 河野健二編『フランス・ブルジョワ社会の成立 ——第二帝政期の研究——』所収論文)(岩波書店, 1977年, 205頁—228頁)

こうした見方を代表するのが, 実は, マクシム・デュ・カンである。しかしその場合でも, 蓮実重彦が記すとおり, 成熟という言葉を使いながら, デュ・カンは青年期の自分(=古いパリ)に対する否定しがたい喪失感を覚えているのである。(蓮実前掲書, 290頁—294頁)なお, この点に関してはベンヤミン前掲書28頁も参照されたい。

- (12) 都市改造による喪失感とはいささか異なる観点ながら, ヴォルフガング・シベルプシェは, その著書『鉄道旅行の歴史 ——19世紀における空間と時間の工業化』(加藤二郎訳)(法政大学出版局, 1982年)の中で, 19世紀の前半に鉄道が発明されたことによってもたらされたさまざまな喪失感についてきわめて興味深い記述をしている。

鉄道が作りだす時間・空間の関係は, 技術以前の時代のその関係にくらべると, 抽象的なものに見え, 時間・空間感覚を阻害するものと写る。というのも, ニュートン力学の実現である鉄道は, 技術以前の時代の交通の特色となっていたものすべてを否定し去るからだ。郵便馬車と街道との関係のように, 鉄道は風景空間の中に織りこまれておらず, むしろその直中を突き抜けているように見える。(中略) 生きている連続体として体験された旅の空間のこの喪失に対

して、19世紀は独特な隠喩を生み出した。空間と時間を抹殺する力として登場した鉄道は、繰り返し発射体として描かれている。(53頁および71頁)

シベルブシェによれば、そもそも、オスマンなどによる都市改造ということ自体、「産業革命全般の、特に鉄道による輸送革命の結果である」(220頁)という。しかも、そのため、「パリが整理され、[交通のための新しい]街路が通ったことで、古いパリに親しんでいた住民たちは、最初の鉄道旅行者たちと似た運命に逢着する」(228頁)と彼は主張する。

馬車旅行での空間・時間知覚に慣れていたために、鉄道旅行を時間と空間の抹殺として体験したあの人たちと同様に、パリの住民たちの目には、交通のために整理されて変形したパリは抹殺されたと写る——それも二倍の烈しさで。というのは、パリは空間的連続性と歴史的連続性が、具体的に打ち砕かれ破壊されたからである。鉄道は古風な叙情性に終止符を打つ。新しい大通りはパリの詩情を終焉させる。いずれの場合も、新しい技術が古いものに終わりを告知したとき、古いものが初めて詩的な姿をとり始める。(228頁—229頁)